



声にならない声を聴く。
見えないものを見る。
耳を澄ませて、目を凝らして。

今村彩子監督 ドキュメンタリー映画

架け橋 きこえなかった3.11

小誌で何度も伝えている、耳の聴こえない映像作家・今村彩子さんの活動。東日本大震災の後、いち早く被災地に駆けつけた彼女は、一般にはなかなか情報が伝えられない、被災者の中にいるろう者の取材を続けてきた。その様子はCS放送「目で聴くテレビ」を通して「架け橋」シリーズ(全4話)として制作され、DVD「手話で語る3.11」「音のない3.11」にもまとめられた。そしてこの夏、10回にわたって被災地に赴き、カメラを回した48時間の集大成として、ドキュメンタリー映画「架け橋 きこえなかった3.11」が完成した。

文=北川裕子 写真=松本幸治

今年7月、東日本大震災から2年4ヶ月が過ぎた仙台市青葉区。被災地の中でも急ピッチで復興が進んでいるエリアだが、道路もビルも工事中のところが多く、被災地から離れた者の目から見ると、「日常」はまだ遠いように感じられた。今村さんは、市内の病院のリハビリルームに、宮城県ろうあ協会会長の小泉正壽しんじうさんを訪ねて来ていた。被災直後から、県下に散らばるろう者の支援に奔走してきた小泉さんは、2011年の年末に疲労とストレスから脳梗塞で倒れてしまった。右半身に麻痺が残り、最初は起き上がることもままならなかったが、必死のリハビリで1年後には再びクルマのハンドルを握れるまでに回復した。この日は看護師の女性と手話とメモを使って話しながら、右手のマッサージを受けていた。指を一本一本ほぐして、親指を立て、ゆっくりと開いたり握ったりする作業を繰り返す。小泉さんにとって自由に動かせる右手は、日常の動作とともに、「言葉」を取り戻す意味を持つ。

ドキュメンタリー映画「架け橋」は小泉さんを主人公として、震災直後の混乱から、県内のろう者がどこにどう避難しているのか、まず状況を把握するための情報収集活動を追う場面から始まる。宮城県下に暮らす聴覚障害者は約6000人、そのうちの363人がろうあ協会の居住者と、ろう者がいる避難所の場所を記した地図を作成した。だが耳の聴こえない人にとって命綱ともいえる携帯電話のメールが使えない状況下で、こうした情報収集は気の遠くなる作業だ。実際に足を運ぶにも、ガソリンが不足し、橋や道路は寸断されている。かすかな情報を頼りに、一人ひとりを訪ね、そこからまた新しい情報を得て、次へと繋ぐ地道な活動だ。そうして見つかったろう者の様子を、映画はオムニバスのように紡いでいく。それは小泉さんたちが、人から人へと結んだ架け橋そのものでもあった。

命に関わる情報に 格差があつてはならない

避難所で出会う、ろう者の中には、津波の警報が聴こえず、避難所へ行くように緊急放送が流れていたことを知らなかった人もいた。近所の人が助けに来てくれて一緒に避難できた人もいれば、揺れが収まったことに安心して自宅に残り、津波が来て閉じ込められてしまった人もいた。幸い、水が来なかった2階の寝室で夜を過ごし、家が流されなかったから助かったが、同じようなケースで津波の犠牲になってしまったろう者もいたことだろう。今回の震災では、ショッピングなどに障害のある人たちの死亡率が一般の場合の2倍にもなっている。これは聴こえない人に限ったことでなく、目の見えない人も、肢体不自由者も、それぞれ通常の2倍の確率で犠牲が出ている。



サイレンが聴こえなかったり、物理的に逃げるのが困難だったりしたために、助かったかもしれない命が失われてしまったのだ。

今村さん自身も、被災地での取材中に震度6の余震を体験した。大きな揺れにカメラが倒れたが、再び撮影しようとして起き上がる彼女の耳には、津波警報が鳴っているのが聴こえていなかった。一緒にいた聴者のスタッフの誘導によって、急いで海のそばを離れたが、もし聴こえる人がそばにいないれば危ない状況だった。

「命に関わる情報に格差があってはならない」

今村さんは取材を通して強く確信し、被災地の取材を続け、世の中に発信し続ける必要性を実感することになる。

まず、ろう者の存在を知ってもらおう大切さ

人が抱えるハンディキャップにはさまざまな種類があるが、ろう者の場合、外から見ただけでは障害が分からないということが意外な壁となっている。普通に行っていると障害があることに気付かれないので、避難所のように知らない者同士が共同生活を送る場所では、

さまざまな問題が生じてしまう。うしろから声を掛けても分からないことで失礼な人と誤解されてしまったり、自分たちが出している生活音に気付かず、周囲の人からすると迷惑に思われてしまった。なにか案内の放送があっても聴こえないので、いつも周りの人の様子を見ながら付いていくしかなく、緊張感から疲れが溜まりがちになり、手話ができる人が近くにいないければ会話もなく、孤立してしまうケースも少なくない。彼らは避難生活においても弱者となってしまうのだ。

さらにもうひとつ、ろう者にとって難しい問題となるのが、コミュニケーション手段への理解だ。聴こえない人といえば手話、もしくは筆談と考えるのが一般的な感覚だろう。ところが手話を使えるのは、ろう者の中でも半数以下だといわれている。先天的または早い段階で聴こえなくなった人は手話を母語とすることが多いが、途中から聴こえなくなった人や難聴になった人の多くは手話を習得していない。そのうえ手話には日本語の文法に則して作られた日本語対応手話と、昔からろう者の間で使われ、独自の言語体系を持つ日本手話、その両者の中間的な表現である中間手話があり、どれを使うかは、その人が育った環境や教育によって異なる。また日本のろう教育の歴史のなかでは、手話を否定し、口話法（話し手の口の動きから言葉を読み取り、音声を使って表現する技術）を推し進め

た時代が長かったため、ある世代には手話に対して抵抗感を持つ人たちもいるという。

さらに今回の映画には、文章が読めない高齢のろう者も登場する。戦時下に幼少期を送った人の場合、教育が受けられず、文字の読み書きが難しいこともある。そもそも言語はまず耳から覚えるものだけに、音のない世界で言葉を習得するのは非常に困難で、学校で勉強しても、途中で挫折してしまう人もいる。聴者と同じように文字の日本語を理解し、使いこなせるろう者はむしろ少数派だ。読んで内容を理解することはできても、書くのが苦手なため、筆談を嫌がる人も多い。

誰もが笑顔になれる明日のために 橋を渡ろう

こうした数々の障壁を乗り越え、命に関わる格差をなくすための第一歩は、なによりもまず、聴こえない人たちの存在を知ることにある。わたしたちが暮らすこの社会には、さまざまなバックボーンを抱える人々が、ともにかけがえのない人生を歩んでいる。その存在を知り、互いの多様性を受け入れ、認め合うことができれば、弱者が犠牲を強いられる構造が続いてしまう。

We all want to live by each others happiness, not by each others misery.



12/21(土)13:30~15:30
「架け橋 きこえなかった 3.11」上映
「今村監督を囲んで」(今村監督、山本病院長らとトーク)
会場/海南病院(愛知県弥富市前ヶ須町南本田 396)
参加費 無料(事前申込み制)
申込み・問合せ/海南病院企画室
TEL.0567-65-2511
FAX.0567-67-3697
email kikaku@kainan.jaaikosei.or.jp

チャップリンは映画「独裁者」のスピーチのなかで、「わたしたちは誰かの不幸の上に築く幸福よりも、互いの幸福の上に生きることを望んでいる」と訴えた。本当の幸せは、きっとそういうものなのだろう。ハンディキャップのある人々が2倍も犠牲になるような不条理を、よしとする人はいないはずだ。それなのに相反する現実がある。誰かの痛みに対して無関心や無自覚でいることは、実はとても怖いことだ。わたしたちの目の前にはいつも多くの分かれ道があって、右を選ぶべきか、左に行くべきかを繰り返して問われている。そのときの一步は小さくても、さまざまな選択の積み重ねは、わたしたちを遠く離れた結論へと導いてしまうだろう。

今村さんは、耳の聴こえない彼女だからこそ、気付くことのできる声なき声に真摯に向き合い、彼らの言葉を世に問ひかける。「架け橋」の完成披露試写会では、聴こえる人も聴こえない人も、これまで彼女の活動を支えてきた多くの人が集まった。74分の上映が終わわり、彼女がみんなの前に立つと、会場から一斉に拍手が沸き起こった。それと同時に、聴こえない人たちは、両手をキラキラ星のような仕草でまたたかせた。「拍手」を意味する手話だった。またたく手のひらと、鳴り止まない拍手の音と。それぞれの表現で贈られた称賛の声に、笑顔で応える今村さんがいる。彼女が架けた橋を渡って、この光景が日本のすみずみに、世界にも、優しく伝わっていったら、この世界はもっと住みやすく、互いの幸せの上に成り立つものになってくれるかもしれない。たとえ離れた場所であっても、立場が違う者同士でも、人と人の心には、虹のような橋が架かるのだと、ひらひらと舞う音のない拍手は教えてくれた。

